熊本城の宇土櫓について

正 会 員 北 野 隆*

はじめに

熊本城の宇土櫓については、すでに城戸久博士によって考察がなされている¹⁾が、造営年次や「宇土櫓」の名称など不明なところも多い。

本稿では、新しい資料をもとに「宇土櫓」の名称の由来、造営年次などについて検討を行なうものである。なお、宇土櫓の造営年次を検討するに当たって、熊本城の造営経過も合わせて考察している。主な内容は次の各項よりなる。

1. 熊本城の造営年次について
2. 「宇土櫓」なる名称の由来について
3. 宇土城破却について
4. 結 論

1. 熊本城の造営年次について

熊本城は、熊本平野の北部より続く、高地稜線の南端茶臼山丘陵に位置している。この茶臼山は南の坪井川、西の井芹川に挟まれ、東部に高く、西部に低くなっている。この地形を利用して、熊本城は東より本丸、二の丸三の丸を設けた平山城である。

はじめに熊本城が加藤清正によって造営されるまでの経過について述べる。

天正 16 年 (1588)、豊臣秀吉は加藤清正に肥後半国 20 万石を封じた。肥後半国に封ぜられた清正は、天正 16 年 6 月 27 日、それまでの佐々成政の城であった隈本古城に入っている。

その後、清正は隈本古城の東に位置する現在の茶臼山に新城を縄張りし、普請に着手した。この着手の時期については、諸説があり、確定していない。

着手の時期として最も早いのは、『古城考』²⁾に記される慶長元年 (1596) である。

次いで「瓦師 福田家先祖附」³⁾にみられる慶長 3 年 (1598) である。更に、熊本博物館に蔵される天守跡出土瓦⁴⁾に記される慶長 4 年 (1599) である。そして、『藤公遺業記』⁵⁾に記される慶長 6 年 (1601) である。

これらの諸説の内、慶長 6 年説が有力視されてきた。それは次のような原因によっている。加藤清正が天正 19 年に肥前名護屋城の普請を行い、翌年には朝鮮に向い、慶長元年一時帰国するが慶長 2 年には再度朝鮮に戦い、慶長 3 年に帰国する。そして慶長 5 年には、関ヶ原の戦

が行なわれている。これらの事を考慮しての慶長 6 年説であった。

しかし、新しい資料に慶長 4 年と考定される「下川家文書」がある⁶⁾。この文書は、城普請に百姓を使っているのを家老下川又左衛門が禁止したものである。この資料と同時に、先の天守跡出土瓦にも慶長 4 年の銘がみられるから、この頃には熊本城では本格的な工事が行なわれていたと察せられる。

熊本城の普請が一応完成するのは、「乃美家文書」⁷⁾にみられる慶長 12 年 (1607) である。

次に熊本城内の建物の造営年次について考察する。建物についての資料は少ないが、その内、最も古いものは『肥後国年歴』⁸⁾に記されるものである。この資料によると、安永 8 年 (1779) 5 月に熊本城の出丸にあった乾御櫓が修覆され、棟札が見出された。棟札には、慶長 7 年 (1602) 10 月にこの櫓が出来上がり、加藤清正、自ら出席して完成祝が行なわれた事が記されている。

乾御櫓は、棟札にも記されるように、本丸の西に配される出丸に建てられ、その櫓が慶長 7 年に完成しているから、本丸の天守をはじめ、櫓などは、この頃には出来上がっていたと思われる (図-1)。

更に、熊本城内の殿舎に関する文書として、慶長 15 年 (1610) の「大木文書」⁹⁾が知られる。

この文書は、清正より国許への手紙である。慶長 15 年清正は名古屋城の普請を行なっており、やがて国許に帰るといふ。そこで、熊本城内の広間作事の進捗状況と国許屋敷である花畑の作事についての指示を行なっている。

更に、熊本城内の広間作事については、同じく慶長 15

図-1 「熊本城図」(永青文庫蔵)

* 熊本大学 助教授・工博

(昭和 56 年 1 月 26 日日本稿受理・討論期限昭和 57 年 1 月末日)

年7月の「下川文書」¹⁰⁾がある。

この文書によると、広間の作事も完成間近と思われ、絵書の指示が行なわれている。

これら「大本文書」、「下川文書」から察すると、熊本城内の本丸殿舎は慶長15年(1610)に行なわれていることが知られる。

先の「乃美家文書」に記される慶長12年の「…今度御城出来…」は、主として石垣普請、天守、櫓などの城郭建築の完成であり、本丸殿舎は含まれていなかったと思われる。

2. 「宇土櫓」なる名称の由来について

現在の「宇土櫓」についての名称がわかる最も古いものは、寛文6年(1666)の『御城分間』¹¹⁾である。この文書によると、宇土櫓について「御天守西ノ御丸 五階御矢蔵」と記され、当時、「宇土櫓」という名称は一般的でなかった事が知られる。この『御城分間』を記した「別井三郎兵衛」は、肥後藩の御用大工であり、『御作事所諸棟梁先祖附』¹²⁾によると、「別井家」は、加藤氏代から御用大工として仕え、先祖は熊本城の普請・作事にも参加したことが記されている。この事を考慮に入れると、加藤氏代にも、「宇土櫓」という名称は一般的でなかったと考えられる。

ところが、江戸時代中頃になると、兵法学者や有識故実を著わす人達が現われる。これらの人達の中に「渡辺玄察」がいる。彼は、元禄期に『拾集物語』や『渡辺先祖以来今事記』などの本を著わしている。彼の著わした『拾集物語』の「清正様惟善公を阿蘇宮之神主に御取立被成候事」¹³⁾の項によると加藤清正は、小西領を拝領した後、宇土城の小西家の侍をはじめ宇土城代南條玄宅、家老建部兵庫頭を許され、又惟善公など、熊本へ呼び寄せられた事が記されている。

又、同じ時期にこれらの本と共に、熊本城下町の内¹⁴⁾や熊本城内の各櫓などにも、その由緒によって名称がつけられている。熊本城内の各櫓については、『肥後録』¹⁵⁾の「城内櫓数并櫓門冠木門木門数之事」の項によると「宇土櫓、宇土三階櫓、宇土脇平櫓、宇土類族方櫓、同所御預人召置候三階櫓、数寄屋丸脇長櫓、数寄屋丸五階櫓…」などの名称がみられる。

この『肥後録』に記される櫓の順序と江戸時代末期の絵図に描かれる櫓の順序とを勘案すると、次の図のように符合すると考えられる(図-2)。

この図にみられるように、熊本城内では加藤平左エ門屋敷廻りの櫓と数寄屋丸廻りの櫓に「宇土…」なる名称が付けられている。この内、数寄屋丸廻りの櫓は、「宇土類族方櫓」、「同所御預人召置候三階櫓」と記されるから、元小西家の侍衆が、熊本城内にも召置かれたのに由来する名称である。

これらの名の由来についての信否の程はわからない

図-2 「熊本城図」(永青文庫蔵)
()の名称は「肥後録」による。

熊本城の宇土櫓

が、先の御用大工別井三郎兵衛によって記された寛文6年の「御城分間」¹⁶⁾には「権兵衛殿被召置御丸三階矢蔵」などの名称がみられるから、これらの櫓の名称も、全くの思い付きによるものではなからう。

次に加藤平左エ門屋敷廻りの櫓に「宇土櫓」、「宇土三階櫓」、「宇土脇平櫓」なる名称がみられる。加藤平左エ門は、慶長5年の宇土城攻略に活躍する加藤家の重臣で、渡辺玄察の『拾集物語』や『渡辺建長以来之故事』にも度々名前が記されている。この内、『渡辺建長以来之故事』¹⁷⁾によると、加藤平左エ門は、元小西家に仕えていた宇土城代南條玄宅、家老建部兵庫頭をはじめ侍衆の面倒をみていたことが記されている。

このような事を考慮すると、加藤平左エ門屋敷廻りにみられる「宇土櫓」などは、先の数寄屋丸廻り「宇土類族方櫓」、「同所御預人召置候三階櫓」などと同様に元小西家侍衆の取締りや管理をする宇土関係役所であった事による名称と考えられる。

この事を裏付けるように『肥後国誌』¹⁸⁾の原本になった享保13年(1728)の成瀬久敬による『新編肥後国誌草稿』¹⁹⁾の「宇土城」の項には、「宇土櫓」に関する記事はみられない。それは、享保期迄は、「宇土櫓」なる名称が宇土城の天守の移築によるものではなかったから

である。

ところが、明和9年(1772)、森本一端によって著わされる『肥後国誌』²⁰⁾には、先の『新編肥後国誌草稿』の「宇土城」の項に「熊本城築ノ後、当城ノ天守ヲ熊本城内ニ引移シテ宇土櫓ト称ス」と付加され、「宇土櫓」は宇土城の天守を移築した事による名称だという。

このように、18世紀中頃を過ぎると「宇土櫓」の名称の由緒が、先の「宇土関係の役所的なもの」から「宇土城の天守を移築したもの」へと変化した。

この原因は、この頃になると、先の元禄8年(1695)渡辺玄察によって著わされた『拾集物語』の内容に変化が生じた為であり、又、同時に熊本城内の各櫓にみられた「宇土脇平櫓」、「同所(宇土)御預人召置候三階櫓」、「数寄屋丸御長櫓」、「数寄屋丸五階櫓」などの名称の内、前の部分が略されて江戸時代末期の絵図(図-2)のように「平御櫓」、「三階御櫓」、「長御櫓」、「五階櫓」と呼ばれ、「宇土…」、「数寄屋…」なる名称が順次消失し、短い名称で略しようがなかった「宇土櫓」のみ、その名称が残った為である。

『拾集物語』の内容の変化については、渡辺玄察の子孫である渡辺周斉が著わしたものが挙げられる。彼は曾祖父(渡辺玄察)の著わした『拾集物語』の原本が焼失した為、記憶によって新しく著わしている。この期の『拾集物語』²¹⁾は、記憶によって著わされたものだけに、先のものと若干違ってくる。この文章の内、特に「宇土城扱又小西家頼侍清正へ被召置儀被遊御貴免候故に城をも御引取被成(中略)左様之侍宇土へやつは被召置候其宇土小路に被罷在候侍衆を以後熊本へ御引寄被召置候(後略)」が注目される。

文中の「城をも御引取被成」が「移築」と解釈され、熊本城内で「宇土…」なる名称をもつ「宇土櫓」に当てられ、「侍衆を以後熊本へ御引寄被召置候」と混合されて、「熊本城築の後」になる。そして『肥後国誌』にみられるように「熊本城築の後、当城ノ天守ヲ熊本城内ニ引移シテ宇土櫓ト称ス」と「宇土櫓」の由緒が変化したものと察せられる。

以後、弘化2年(1845)の八木田政名によって著わされる『新撰事蹟通考』²²⁾によると『肥後国誌』に記される「熊本城築の後…」ではなく、「隈本城築ノ時…」と訂正されるが、もともと根拠のあるものではない。

『肥後国誌』は、藩主細川重賢公の君命によって、森本一端が著わし、肥後藩へ提出したものだけに以後、「宇土櫓」の由緒は確定的なものとなる。

3. 宇土城の破却について

小西行長の宇土城の破却については、『肥後国誌』²³⁾や『新撰事蹟通考』²⁴⁾によると、慶長17年(1612)であった。この事は、これらの本だけでなく、当時の文書²⁵⁾も残されている。

この期には、宇土城だけでなく、全国各地の城郭が「一国一城令」によって破却されているが、その状況を記した文書²⁶⁾が、宇土城ではないが存在するから参考にしよう。細川領であった豊後木付城である。

豊後木付城は、慶長6年(1601)より10年にかけて、細川忠興によって普請が行なわれ、松井康之が城代を務めていた。しかし、この城も「一国一城令」によって、慶長20年8月27日より破却が行なわれ、三重の天主を始め数多くの矢倉が解崩されている。この破却で注目されるのは、各建物の部材が注意深く解体され、その城材の内、小舞や窓の子に至るまで、再利用されている事である。

宇土城の破却についても、各建物の部材が注意深く解体され、その城材が再利用されたと思われる。この事について「常清寺文書」²⁷⁾によると、元和年中に宇土城の城材を使って、川尻に蔵が建てられた事が記される。

以上のように、小西行長の宇土城は、加藤忠広代の慶長末期から元和期にかけて破却が行なわれ、その城材は川尻の蔵などに再利用された。

4. 結 論

江戸時代前期、寛文期頃までは「宇土櫓」なる名称は一般的ではなかった。ところが、江戸時代中期、元禄期古老(渡辺玄察)によって書き著わされた『拾集物語』等によって、熊本城下町や熊本城内の各櫓に、その由緒にちなんでそれぞれの名称が付けられている。加藤平左エ門屋敷廻りの櫓に「宇土櫓」なる名称がみられるが、この櫓の当初の由緒は、現在のものと違って、近くにみられる「宇土類族方櫓」や「同所御預人召置候三階櫓」に召置かれた元小西家の侍衆を取締り、管理する宇土関係役所的なものによる名称であった。

ところが、18世紀中頃を過ぎると、先の『拾集物語』の内容にも変化が生じ、また、熊本城内の各櫓にみられた「宇土…」なる名称も消失し、「宇土櫓」のみ、その名称が残される。この変化した内容と「宇土櫓」が結びつき、明和9年(1772)、森本一端によって著わされる『肥後国誌』では、「宇土櫓」の由緒が、先のものから変化して、「宇土城の天守を引き移したもの」となる。『肥後国誌』は、細川重賢公の君命によって著わされ、藩へ提出されたものだけに、その由緒は確定的なものとなる。

宇土櫓の造営年次については、すでに述べたように、出丸の乾御櫓が慶長7年10月に完成しているから、城内でより重要な位置に存在する宇土櫓は、その前には完成していたとみられる。すなわち、宇土櫓は慶長7年10月を下らない慶長7年(1602)頃、熊本城の他櫓と一緒に造られたもので、破風のむくりなど、その特異な意匠と共に城郭研究史上、重要な遺構といえよう(写真)。

参 考 文 献

- 1) 城戸 久:「熊本城宇土櫓造営年次私考」日本建築学会論文報告集, 第30号, 昭和18年9月
- 2) 『古城考』は, 森本一端の著で, 肥後藩内の古城 275 ケ所について, その所在, 城主, 事蹟などを記したものである。森本一端は天明4年11月に80才で亡くなっている。
- 3) 『福田家先祖附』(『熊本市史』昭和7年3月25日発行)
「先祖福田五右衛門儀, 清正公御代より, 小山村に居住仕瓦職仕居候処, 慶長三年, 熊本御城造営の節, 瓦師棟梁役に被召抱, 御扶持方被下置候。」
- 4) 熊本博物館に蔵される天守跡出土瓦に次のような銘がある。「慶長四年八月吉日」
- 5) 『藤公遺業記』は, 鹿子木維善の著わしたもので, 加藤清正の肥後における土木工事を中心に記したものである。その中に次のように記される。
「慶長六年辛丑正月江戸え 参府ましまし 御城を茶臼山へ御経営願濟三月御帰国茶臼山開き玉ひ御自身御縄張有之共八月より鉄初有之無比類御城成就に至御天守一巻の事は赫々たる御経営御要害之事は筆に尽し難し」
- 6) 「下川家文書」(『熊本県史料 中世編五』)
尚以名之下ニ可有御判候
急度令申候, 御給人方人足被遣候事, 去年帰朝之刻, 被御停止候, 則各へ申渡候, 然処, 今度御城御普請百姓相召候様申候, 何と被仰触候哉, 沙汰限候, 急度御改候て可承候, 恐々謹言
三月廿五日 下川又左衛門 元宣
加藤善左衛門尉
この文書には, 年代は記されていないが, 「去年帰朝之刻」と記される。加藤清正是慶長3年に朝鮮より帰国しているから, この文書の年代は慶長4年と考定される。
- 7) 「乃美家文書」(『熊本市史』)
一筆申触候隈本之文字之事今度御城出来ニ付御改候而熊本ト御書被候間此以後其旨可被心得候此段御領之中不洩様可被申触候, 恐々謹言
慶長十二年□月七日 加藤□□□□□□□□
- 8) 『肥後国年歴』(『肥後近世史年表』生田 宏著, 室室諦成校訂, 日本談義社, 昭和33年6月)
「安永八年五月条
乾御櫓修覆の処, 棟札出ず, 慶長七年寅十月出丸にて十八棟の末に大黒矢倉出来に付, 殿様御出いおい, 加藤平左エ門, 二番手組棟梁正木治郎, 上役齊藤, 吉田, 林, 佐々間, 大工迫, 大坂玉造与市, 芸州宮島彦市, 江州伝法新助, 玉名八蔵, 播州三ヶ月長右エ門」
- 9) 「大木文書」(『熊本県史料 中世編』)
大木土佐守相越候飛脚(中略)是より尾州御普請場へ越候条可得其意候, 御普請も手間入間敷候条相仕舞やがて可得国候, 将又広間作事之儀先書に如申遣候, 無由断仕舞可申候, 並花畑之作事も広間内雑作仕立候へば申遣日限之時分相仕舞其時日之役ニ立候や可仕候(後略)
卯月十五日 清正印
大木土佐どのへ
中川□どのへ
下川又左衛門どのへ
この文書には, 年次は記されていないが, 文書中に「尾州御普請場」がみられ, 名古屋城の普請が慶長15年に行なわれているから, この文書は, 慶長15年のものと考定される。
- 10) 「下川文書」(『熊本県史料 中世編』)
壽林もの指越ニ付而, 書状加披見候, 此方普請之事, 如形令出来候, やがて相仕舞, 可下国候条, 可得其意候
(左)
一. 本丸広間之絵国之絵書迄にてハ遅く候由候, 平右衛門

- (左)
尉ハ居候ハぬ哉, 平右衛門尉ニ頭取をさせかゝせ, 手代之ものすくなく候て, はか不行候ハ、上かたより手代之もの呼下可申候, 此方へ申越迄も無之事ニ候国之絵書ニ絵出しをさせ, 大事之広間ニ候に, やくにたち可申候哉
(中略)
一. 花島作事, 留守中番等無由断之由尤候, 尚追而可申下候. 謹言
七月廿二日 清正黒印
中川壽林方へ
下川又左エ門とのへ
大木土佐とのへ
9) の「大木文書」が慶長15年と考定されるから, 「大木文書」にみられる花畑屋敷の普請が「下川文書」にもみられ, 同じく慶長15年のものと考定される。
- 11) 『御城分間』(細川家永青文庫蔵)
前略
一. 式拾五間半 御天守西ノ御丸 五階御矢蔵
内拾壱間半 五階御矢蔵土台ノ瓦棟迄
拾四間 石垣ノ高サ
後略
寛文六年二月十二日
別井三郎兵衛
元田八右エ門殿
興津才右エ門殿
 - 12) 『御作事所諸棟梁御手職人迄先祖附』(細川家永青文庫蔵)
「御大工小嶋重三郎」の項
小嶋吉左エ門儀幼年ニ御座候ニ付姉御大工棟梁別井三郎兵衛方江引取養育仕, 右三郎兵衛儀者清正公奉人ニ而當御城出来之節右三郎兵衛親別井新左エ門と申者勤功御記候ニ付御入部之刻五人扶持御切米式拾石被為拝領御大工棟梁役江召抱候」
 - 13) 『拾集物語』(『肥後文献叢書』歴史図書社, 昭46.9)
「清正様惟善公を阿蘇宮之神主に御取立被成候事」
加藤清正公に肥後国右之通小西落去後に御拝領被成候故宇土之城小西家頼之侍御取抱被候儀被遊御貴免候故南條玄宅, 建部兵庫頭と申仁人被召置候処に惟善公は右に書出候通に小西城下へ育まれ御座候を早々熊本へ御呼被成阿蘇神主職に御取立被成度思召候(後略)
元禄八年亥文月日 六十四歳
渡辺惟清入道玄察
安藝掾殿
彦之進殿
 - 14) 熊本城下町では, 豊後街道筋の京町に「宇土小路」なる名称がみられる。享保13年(1728)の成瀬久敬の著になる『新編肥後国誌草稿』が最初である。
 - 15) 『肥州録』(熊本県立図書館蔵)
「城内櫓数并櫓門冠木門木門数之事」
一. 宇土櫓 一. 宇土階櫓 壱軒 一. 宇土脇平櫓 二軒
一. 宇土類族方櫓 壱軒 一. 同所御預人召置候三階櫓
一. 数寄屋丸脇長櫓 一. 数寄屋丸五階櫓(後略)
『肥州録』は, 細川宗孝公の手鑑である。宗孝公は享保17年(1732)から延享4年(1747)まで藩主であり, その間に記されたものである。
 - 16) 『御城分間』(細川家永青文庫蔵)
前略
一. 拾六間三尺 権兵衛殿被召置御丸
内七間 三階矢蔵ノ高サ
九間三尺五寸 三階御矢蔵土台ノ瓦棟迄
石垣ノ高サ
 - 17) 『渡辺建長以来之故事』(『肥後文献叢書』歴史図書社, 昭46.9)
佐々殿へ被罷居候建部兵庫頭以後從太閤様小西殿へ被成御拝領小西殿落去後に從御所様加藤清正公へ小西の家人被召置候事被遊御免候故宇土城代南條玄宅老を始御家人に被相

成候砌建部氏も人数一分にて清正公へ被相勤候(中略)清正公へ後詰之仁人就中軍兵衛事密々宜被申上候故加藤平左衛門殿折々吉次儀御奉公仕候へと御座候へ共(後略)

- 18)『肥後国誌』は、明和9年(1772)に森本一端によって著わされたものである。「宇土櫓」は、宇土城の天守を移建したものという最初の本である。

- 19)『新編肥後国誌草稿』

「宇土城」の項

「(前略)南條元宅其外城中ノ諸士各加藤氏ノ家人トナル同年十月カ清正小西カ舞領ヲ合セ一國領知ノ時其臣加藤与左衛門並河金右衛門^{後号志摩}ヲ城番トシ後中川太郎平ヲ城代トス参考太平記、太閤記、関ヶ原大全、清正記、古老書記」『新編肥後国誌草稿』は、享保13年(1728)に、成瀬久敬によって著わされた。

- 20)『肥後国誌』

「宇土城」の項

「(前略)南條ヲ始メ城中ノ諸士各加藤侯ノ家人ト成ル、同年十月清正侯小西カ舞領ヲ合セ一國領知ノトキ並河金右衛門ヲ城番トシ後ニ中川太郎平ヲ城代トスト云。熊本城築ノ後当城ノ天守ヲ熊本城内ニ引移シテ宇土櫓ト称ス...

- 21)『拾集物語』

「清正公阿蘇惟善を同神主に被成御取立候事附リ色々之事」(前略)清正公に小西落去後右に書出候通にかさねて御拝領被成候故に宇土城初又小西家頼侍清正へ被召置候儀被遊御貴免候故に城をも御引取被成南條玄宅を始前々佐々成政の御家人右行長へ從秀吉公御拝領被有候其侍衆今又清正公へ被召置候儀從將軍様被遊御貴免候ニ付佐々殿へ阿蘇の各致密忠候御内通取次被致候建部兵庫頭をも清正へ被召置候、左様之侍宇土へやつは被召置候其宇土小路に被罷在候侍衆を以後熊本へ御引寄被召置候故ニ(後略)

右曾祖父玄察十遺の記録十卷余御座候処、去冬二卷焼亡仕候内此一條記臆仕候間如此に御座候以上

未九月

渡辺周斉識

この『拾集物語』が記憶によって著わされる年代について考察する。渡辺玄察(1632~1714)は渡辺周斉にとって祖

父に当ると記されるから、「未九月」は、18世紀中頃過ぎと考定するのが妥当なところである。

- 22)『新撰事蹟通考』は八木田政名の著で、著者は弘化4年、69才で亡くなっている。

- 23)『肥後国誌』

(前略)後ニ並河志摩守城代ト成忠広侯ノ時依台命一國一城トナル時ニ慶長十七年壬子年当城ヲ刷ル、上使中山勘解由、加藤家ノ奉行ハ堀内右衛門兵衛、井上大九郎等也」

- 24)『新撰事蹟通考』

慶長十七年公命ニ依テ城郭ヲ破却ス。一書ニ云此時堀内右衛門兵衛、井上大九郎奉行トシテ、城ヲ解崩ス。上使中山勘解由ト云

- 25)『新撰事蹟通考』

六月二十七日庚寅因藤松幼冲老中奉命下其長臣書

條々

一、水俣、宇土、矢部三箇所之城可為破却然水俣、宇土に有之諸侍妻子共熊本之引越尤に候事(後略)

右之条々猶肥州之被申達以其上可被相究者也仍如件

慶長十七年六月二十七日

青山図書助

土井大炊頭

酒井雅楽頭

本多佐渡守

加藤丹後殿

(略)

- 26)拙稿「元和元年、一國一城令によって破却された豊後木付城について」日本建築学会九州支部、第24号、昭和54。

- 27)「常清寺文書」(『川尻町史』昭和10.9)

安武市之亟好次、筑後州太守田中勝家公に仕へて家禄三百石の恩賞を蒙り勤仕星を戴き月を帯びて勞をなし、かば、君、其良実なるを察し給ひて子息主膳正殿に附け参らせらる。然るに好次其退くべき時を知りて、元和年中禄を返し國を去らんとする時、君曰く筑前肥前に仕ふるは許容す、たゞ肥後に於て主計頭清正に仕ふる事は許さずと云ふ(中略)清正公宇土に寄せて、小西摂津守を責落とし、其城材を引て河尻の藏を立て給へるに依って…(後略)

SYNOPSIS

UDC : 72.03 : 728.81

ON THE UTO TURRET IN THE KUMAMOTO CASTLE

by Dr. TAKASHI KITANO, Assistant Professor of Kumamoto Univ. Member of A.I.J.

It has been supposed that Uto Turret was removed from Uto to the Kumamoto Castle.

But it is only a hypothesis. This study aims to clarify this assumption is not True, by the old literary documents. The Uto Turret was originally built by order of the feudal-lord Kiyomasa Kato in the Kumamoto Castle about A.D. 1602, not transferred from Uto. The name of Uto Turret was derived from the offices which installed in it and around it.

In these offices, Kato's feudal government controlled the vassals of ex-feudal-lord Yukinaga Konishi.